

Green Story

第34回

(2023年度)

緑の環境プラン大賞

受賞作品集



私の、そして、
みんなの「Green Story」

審査委員会委員長 進士五十八

『Green Story』。この新誌名はすばらしい。「緑の環境プラン大賞」、究極の目標だからです。

かねて私が『緑のまちづくり学』（学芸出版社、1987年）や『グリーン・エコライフ』（小学館、2010年）で語ってきたことでもあります。greenの語源はアーリア語のghra(成長するの意)。よって「生命」そのものとも書いてきました。

本文の第34回受賞の環境風景をゆっくり味わってみてください。

水と緑の風景には生き物の生息が、針葉樹と草花には北の国らしさを、インドアグリーンとウッディインテリアからは人のぬくもりを、花と緑とボランティアからは癒しを、アミーゴ アミーガでエディブルランドスケープ子育てを！

植物的自然の向こうに、たくさんの私と私たちの顔が見えます。

課題解決に向け、仲間と共に地域から地球まで。自らの経験と知恵、創造力豊かで、アイデアとアート感覚抜群のマンパワーが集まりコラボすれば、「緑の環境プラン」の実現プロセスで人それぞれ「自己実現（生きがい）」とグリーン・ストーリーが生まれます。

モノとしての「緑化」ではなく、わが町わが村、わがふるさとと生命を愛するココロを結ぶ一人ひとりの市民の「Green Story」が誕生するでしょう。

末尾ながら第一生命グループが、こうした国民的活動を資金面のみならず、本誌を環境市民交流の共有広場として提供くださることに心から謝意を表したいと思います。

contents

S シンボル・ガーデン部門

国土交通大臣賞	社会福祉法人 玉美福祉会	八戸ノ里 みんなで育てる森プロジェクト	大阪府東大阪市	02
都市緑化機構賞	北海道東神楽町	東神楽町複合施設 花の輪「はなのわ」	北海道上川郡 東神楽町	04
第一生命賞	社会福祉法人クラブ	ブーランジェリーガーデン	北海道伊達市	06

P ポケット・ガーデン部門

国土交通大臣賞	新潟医療福祉大学社会福祉学部 社会福祉学科 原口ゼミ	病院を公共の癒しの場に ～花の40mリハビリロード～	新潟県新潟市	08
第一生命財団賞	特定非営利活動法人 子育て支援グループamigo	福祉のまちのエディブルランドスケープ 緑・農の共同管理が生み出すかわりしる	東京都世田谷区	10
コミュニティ大賞	学校法人東北外語学園 日本国際学園大学 笠神認定こども園	生き物とつながる丘の上の小さな宇宙	宮城県多賀城市	12
	学校法人志賀学園 幼保連携型 認定こども園 松の実こども園	緑豊かな水辺に 人々が集い 感性を育む 『松の実の庭』	福島県いわき市	13
	埼玉県立秩父農工科学高等学校	つながりの森	埼玉県秩父市	14
	学校法人国際総合学園 新潟農業・バイオ専門学校	楽しいガーデンづくりで繋ぐ緑のチェーン	新潟県新潟市	15
	一般社団法人 信州子育てみらいネット	中野おしゃべりガーデンズ	長野県中野市	16
	EARTHWORKER合同会社	土中環境再生で京都 大宮交通公園を 生態系コリドーに！	京都府京都市	17
	大阪市立瓜破北幼稚園	豊かな感性・感受性を育む緑の園庭環境づくり	大阪府大阪市	18
	学校法人 三樟学園 一万城幼稚園	想い出のガーデン	宮崎県都城市	19

表紙 豊かな感性・感受性を育む
緑の園庭環境づくり
（関連記事：p18）
裏表紙 東神楽町複合施設
花の輪「はなのわ」
（関連記事：p4）
photo: 坂本政十郎



社会福祉法人 玉美福祉会

八戸ノ里 みんなで育てる森プロジェクト

大阪府東大阪市



空間ゾーニングを行い、特色ある三つのエリアを設定。ここはビオトープ池のある「いきもの水辺」エリア



レイズドベッドにはハーブが植えられている。後ろに見えるのは総合ケアセンター「八戸ノ里向日葵」



「みんなの森」エリアにはかまどベンチも設置された

子どもの成長に合わせ、 ゆっくり時間をかけて「森づくり」

大阪の地で約半世紀にわたり福祉事業を展開してきた社会福祉法人玉美福祉会は、2015年、新たに「八戸ノ里向日葵」を開設、それに伴い敷地内の1000m²のグラウンドを、豊かな緑と触れ合える広場に改修した。

対象地は、東大阪市の準住居地域に位置しており、住居の他家電販売店や学校施設があるが、公共の緑地は少なかった。しかも施設建設以前は、学校のグラウンドの形をとどめていて、「せっかく広々とした面積をもちながら、空間的には殺風景だった」と言うのは、系列施設「たいよう学院」園長の西島由美子さんだ。

そこで、施設建設に合わせ土壌改良工事を行い、対

象地の全面に植生を配し、緑豊かな庭として整備した。

整備にあたり広場全体の利用法とデザインを再検討。施設建設以前からあった藤棚を残しつつ新たに藤棚につながる園路を造成。また、空間ゾーニングを行うにあたり、特色をもつ三つのエリアを設定した。

庭の中心に位置する「みんなの森」は、緩やかに高低差を設けて、散策が楽しくなるように工夫した。子どもたちが自然を観察し、生き物と触れ合えるビオトープを設けた「いきもの水辺」エリア。果樹を中心に、育てながら食を楽しむ「実りの畑」エリア。

三つのエリアは相互に関連し合いながら、五感を刺激する体験の場となっている。「今はまだ森と呼ぶには程遠い庭ですが、いずれ緑あふれる都会の森になっていると思います」と西島さんは、力強く言った。



緩やかな高低差の変化が散策にここちよいリズムを与える



新しい庭になっても残して欲しいという要望のあった藤棚



「実りの畑」エリア内の畑には1年をとおしてさまざまな作物が植えられている



「みんなの森」エリアにはタンク付き手押しポンプが設置されている



「みんなの森」エリアには、近隣に住む子どもたちも遊びに来る

北海道東神楽町

東神楽町複合施設 花の輪「はなのわ」

北海道上川郡東神楽町



3600m²の「ガーデン」には四季折々の花が咲きほこる

「花のまち」を象徴する 花と緑に囲われた複合施設

町内に点在する公共施設を一か所に集約化した複合施設「花の輪」は、樹木に囲われた「まちの森」をコンセプトに、複合施設を樹木で囲うことでまとまりをつくり、いつまでも古びない存在となるよう計画された。

草花が咲きほこる姿から枯れゆく姿まで美しく見せる「ナチュラルスティック・ガーデン」を正面に配置し、「花のまち」東神楽町ならではの花と緑に囲われて、他のどこにもない新しい公共施設のあり方を追求した。

バラなどの園芸植物中心の庭づくりとは対照的に、より丈夫な宿根草やグラス類を中心に、植物本来の姿を生かし、まるで林や森にいるかのような自然な印象

でまとめる「ナチュラルスティック・ガーデン」。文化ホールや役場庁舎にたついでに散策や散歩を楽しむというのでもいいけれど、散策や散歩が目的で、ついでに施設に立ち寄る、そんな公共施設との新しい関係が生まれると面白い。

既存樹木はそのまま保存し、新たに建物周囲にアカエゾマツを輪のように植栽した。花の輪という名称は一般公募で決まったと教えてくれたのは、東神楽町建設水道課の今坂友彦さん。「初めは名称はなかったんですが、公募をかけたところ、はなのわ(花の輪)になった」という。

役場という公共施設にこれほど花と緑があふれる場所は全国的にも珍しい。今後の公共施設のあり方を考えるうえで大いに参考となるであろう。



複合施設の正面には、「ナチュラルスティック・ガーデン」が配置された



白い外壁が印象的な東神楽町複合施設



複合施設は、円形状に植栽されたアカエゾマツに囲われている



宿根草を中心に、可能な限り自然に近い形の庭づくりを目指した



役場庁舎、文化ホール、カフェ、診療所などからなる複合施設



正面のイベントスペースでは、花の講習会やワークショップが開催される



ブーランジェリーガーデン

北海道伊達市



ベーカリーカフェの玄関には、シンボルツリーの黄金ニセアカシアが植えられている

アイヌ語で「夢」という意味の タラブを可能にする場所

社会福祉法人タラブは、障がい者（主に精神障がい者）子ども、高齢者、生活困窮者だけではなく、広く福祉ニーズをもつ人々の支援（就労支援、地域生活支援、入所支援など）を目的に、2002年に設立。地域福祉の担い手としてさまざまな支援活動を行ってきた。

自立を目指す人たちが分け隔てなく誰もが共有できる空間。障がいがある人もない人も誰もが気持ちがいいと感じられる空間。そうした場所を探し求めてきたが、2023年、ついに伊達市に見出した。

対象地は、伊達市の幹線道路に面し、住宅地も近くにある。知名度・認知度が高くなれば、集客は十分に



ベーカリーカフェを取り囲むように設計されたブーランジェリーガーデン

見込める。そこで、まず最初に二つの仕掛けを施す。一つは建物とその外部空間だ。目指すのは、独創的な建物であり、なおかつ建物を取り囲む外部空間も十分に魅力的であること。次にこの場所が自分たちだけでなく、地域住民にとっても居心地のよい場所であること。この二つの目標は、ベーカリーカフェとブーランジェリーガーデンによって実現しようとしている。

「ベーカリーカフェの利益は、障がい者の給与として支給されますし、ガーデンは住民たちにとっては五感で楽しむ庭としてとても好評です」と言うのは、タラブ管理者の松添慎吾さん。就労支援が地域住民との交流につながることを望んでいた松添さん。その夢は、果たして叶ったのだろうか。少なくとも、ブーランジェリーガーデンでは、その夢を語ることは可能だろう。



車いすの人も介護者と一緒に乗り降りできるように工夫されたブーランジェリーガーデンの階段



陽の光をやさしく取り込む
ルーバーフェンス



クレマチスやブラックベリーの鉢植えが置かれたウッドデッキ。壁際に置かれているのは平均台



北海道に自生していた植物をアイヌの人たちは
好んで食べていたらしい



春の新芽と秋は鮮やかな
黄金になることから黄金ニ
セアカシアと呼ばれている



地下のイートインスペースは、地域住民が集うオープンスペースでもある

新潟医療福祉大学社会福祉学部社会福祉学科 原口ゼミ

病院を公共の癒しの場に ～花の40mリハビリロード～

新潟県新潟市



リハビリロードは入院患者だけでなく地域住民の憩いの場としても利用されている



共生社会の創生につながる庭づくり

医療法人愛広会新潟リハビリテーション病院の奥庭の空地を入院患者のリハビリロードとして、また地域住民の憩いの場・交流の場としても利用できるように再整備する、というのが本プランの目的だ。「整備とはいいますが、ほとんどゼロからつくったという方が正確でしょう」というのは、医療福祉大学社会福祉学部社会福祉学科原口ゼミの代表・原口彩子教授だ。

新潟リハビリテーション病院は、2001年開設の私立病院で、歩行者道路の両脇は長らく空き地となっていて、以前から改善が待望されていたという。病院は、本来病气や障がいなどで、心身が弱っている状態の人々が訪れるところ。その意味では何よりも癒しが必

要な場所であるべきだ。

昨今、病院環境への関心が高まり、確かに院内環境は、整いつつある。しかし、病院の外観となるとまだまだというのが現状だろう。病院が地域に開かれ、誰にとっても癒しを提供する憩いの場であって欲しいと望む声は次第に大きくなり、ついに、2024年3月、病院前の230㎡の空き地は、メディカルハーブのボーダーガーデンとして生まれ変わり、それに伴い、病院の玄関へと続く歩行者道路は、40mのリハビリロードとして蘇った。

薬用にも用いられるメディカルハーブと宿根草を中心に植栽されたボーダーガーデンは、整備活動を行う障がい者と地域住民の交流の場の象徴であり、共生社会の道標となるだろう。



ボーダーガーデンの前にはベンチがいくつも置かれていて、散歩の途中で一休みする利用も多い



40mのリハビリロードの両脇には、メディカルハーブがたくさん植えられている



ボーダーガーデンは障がい者との交流の場でもある



園芸福祉士監修のボーダーガーデンは、治療の場でもある

病院こそ最も癒しを必要とする場だ



地域の花好きなボランティアも庭づくりに参加する



特定非営利活動法人 子育て支援グループamigo

福祉のまちのエディブルランドスケープ 緑・農の共同管理が生み出すかわりしろ

東京都世田谷区



「エディブルランドスケープ(食べられる景観)」として、完成したばかりの庭

人と町をつなぐ「食べられる景観」

小田急線梅ヶ丘駅から徒歩3分の好立地に、2023年10月「publico」がオープンした。運営は2001年から世田谷区松原を拠点に子育て支援事業を行ってきた子育て支援グループamigo。多世代が交流できる「小さなカルチャーセンター」として、カフェやライブラリ、ヨガ教室などに活用できるスタジオを併設。随時、料理教室や子ども食堂を開催しているほか、学校外で過ごす児童の居場所としても活用されている。

無垢の木材が多用された室内は温かな雰囲気。南に面した大きな窓からは緑豊かな「北沢川緑道」を望む。建物と緑道の間には40㎡ほどの裏庭があり、この場所に「エディブルランドスケープ(食べられる景観)」をも

つ庭を整備した。「食べることをきっかけにすると、人はつながりやすい。一緒に土いじりをしたり、収穫して食べることで園芸療法的なことにも活用したい」と、amigo理事長の石山恭子さん。

ランドスケープ計画を行ったのは、世田谷を拠点に活動する若手建築都市デザイングループHitasula。DIYでつくりやすく、組み合わせ次第で庭に表情をつくる木製の「三角ファニチャー」を複数造作。緑道側にキンカンなど和風の植物を、窓側にハーブ類やブルーベリーなど洋風の植物を配置、内と外からの景観も意識した。庭は完成したばかり。まだ植栽は小さいが、Hitasula代表の森原正希さんの言う「街のスキマに、自由で明るい雰囲気をつくりたい」との意図も、植栽の成長と共に育まれていくはずだ。



広場にはレンガをランダムに敷き、表情のある空間を構成

誰もがDIYでつくりやすいプランターとして造作された「三角ファニチャー」。腐葉土や切り藁などを混ぜて土をつくり、表面にも藁を敷いて微生物が育ちやすい環境をつくった



無垢の木材が敷き詰められた室内。大きな窓から庭を望む



通りに面して大きな窓が設けられ、誰でも利用しやすい場とすることを意識した「publico」外観



窓辺の低い三角ファニチャーにはハーブ類を、深さがある方にはブルーベリーなど、実のなる中木を植栽

入口周辺にも、三角ファニチャーを置き、植栽を配した



「北沢川緑道」から庭を望む。今後、庭が育ち、緑があふれ、人が集うことで、明るい雰囲気が生じらるう



生き物とつながる丘の上の小さな宇宙

宮城県多賀城市



子どもたちが伸びやかに過ごすことができる広々とした園庭

在来の植生と生物が息づく自然循環型のビオトープ。すのこ壁の裏側には、雨樋から雨水を集める雨水タンクが設置されている



園庭には蜂の食草やミツバチが訪れる花やハーブを植え、植物と生き物の関係が学べる場をつかった

ビオトープの様子を熱心に観察する子どもたち。季節にはトンボがたくさん飛来し、クロスジギンヤンマも観察された

子どもたちの心身を育てる自然体験

2021年3月、50年以上の歴史をもつ公立保育所から民営のこども園として新たなスタートを切った笠神認定こども園。これを機に園舎を新築すると共に、約1350㎡もの広さをもつ園庭も改良。既存の樹木や畑などを残しつつ、緩やかな起伏をもつ芝生広場に整備。果樹や草花も増やし、子どもたちが自然豊かな空間で、多様な体験ができる場となった。

そして今回、さらなる体験の場として計画されたのが雨水を利用したビオトープだ。屋根に降った雨を雨水タンクに貯め、池の水量調節や散水に利用すると共に、オーバーフローした水も池に循環する仕組みをつくった。これらの整備を手掛けたのは、株式会社泉

緑化。園庭の整備以来、ずっと笠神認定こども園に携わってきた鈴木悠一さんは、「池づくりも子どもたちと一緒に。防水層をつくる時には粘土で泥団子をつくり、底に貼り付けてもらいました」と教えてくれる。園長の佐藤美奈子さんも「子どもたちも楽しみながら、とても上手に手伝ってくれました」と笑顔で語る。

池の周囲の植生や水草は市内で採集、池の中の小魚やエビも、市の協力を得て近くの川や池から分けてもらった。メダカは事前に子どもたちが飼育し、30匹ほど放流したそう。 「水質を悪化させるので餌やりもしません。子どもたちはメダカが何を食べて育つのか疑問を抱き、じっくり観察したり、図鑑を調べたりしています」と佐藤さん。自然の中での体験が、子どもたちの豊かな感性と知性を育んでいる。

緑豊かな水辺に 人々が集い 感性を育む『松の実の庭』

福島県いわき市



樹木や水辺には野鳥もやってくる



使用後のプールの水は、畑や樹木の水やりにも利用する



植生に四季の移り変わりを感知しながら育つ



子どもたちと一緒に野菜を育てる楽しみ遊びこそ幼児期にふさわしい学びだ

子どもたちと一緒に野菜を育てる楽しみ

豊かな感性を育てる庭

「松の実こども園」は、現在、0歳～5歳児194名が在籍する、学校法人志賀学園が運営する幼保連携型認定こども園だ。「遊びは幼児期にふさわしい学び」と捉え、「仲良く遊ぶ明るい子」をモットーに、園舎内外の人・物的環境を整え遊びの充実を図ってきた。ただ、園舎が建てられてから10数年が経過し、既存施設(木部)の劣化・腐朽が進行、水路のモルタル・緑石の脱落も見られ、園庭全体の早急な改修が望まれていた。

そこで、この機を捉え、園庭の改修と共に、新たな緑化が実施された。まず、園章のモチーフでもあるクロマツを中心に、より多様な樹木の植栽を行う。そしてその緑化実施にあたっては、新たに「五感」を切り口

に、植物の選定が検討された。

たとえば、「視」は新緑・紅葉と四季折々の木々の変化に注視する。「聴」は、鳥のさえずりや虫の声、川のせせらぎに耳を傾けるなど。

「松の実こども園」の教育方針には「多様な体験の中で感性を育てる」がある。園児は、この言葉通り、園庭にある井戸を利用した水辺と木々のぬくもりのなかで、遊びを満喫し、収穫体験や調理などの活動を通して、感性を育てていく。「毎朝、園児たちは、体操をして、園庭を走り回っています。なかには、図鑑を持って虫の観察に一生懸命な園児もいるんですよ」と言うのは、松の実こども園園長の小泉真美さん。「松の実こども園」は、園庭がつくられることによって、豊かな感性が育っているといえるのだ。

埼玉県立秩父農工科学高等学校

つながりの森

埼玉県秩父市



北斗七星の主星である北極星を神格化したとされる妙見菩薩にちなみ、7基のウッドデッキを配置。イベントスペースや休憩場所として活用する



広場から少し降った場所にある「妙見一の井戸」。ここまでの階段なども生徒らによって整備された



傾斜のある土地で水平を保つウッドデッキ

森の管理を続ける生徒たち。剪定や除草した枝や草は一箇所に集めてコンポストに

自然を通じて地域の伝統文化を表現

秩父妙見信仰発祥の地とされる「廣見寺」に近い森の中、一説に妙見菩薩が秩父神社に合祀される際に渡って行ったとされる「妙見七井戸」の一つ、「妙見一の井戸」がある。伝説が息づくその場所も、長らく人の手の入らない荒れた敷地となっていたが、地域の歴史・文化を活かし、人々の交流の場とすることを目的に、今回整備されたのが「つながりの森」だ。

手掛けたのは埼玉県立秩父農工科学高等学校森林科学科の生徒たち。土地所有者の常楽寺住職や、森に隣接する秩父こども園の栗原真紀園長も、生徒らの企画に賛同。同学科の栗原正博教諭の友人でもある丸浜設計舎・濱田忠沖さんも生徒らの熱意を受け、ランドス

ケープ設計や資材の提供に力を貸した。

対象地は約300㎡。かつては地元企業の社宅用広場で、住民が花と実を楽しんだウメも、枝が伸び放題で実付きも悪く雑草に埋もれていた。生徒らは木々を剪定し下草を刈り、すっきりとした広場を整備。そのうえで、妙見菩薩にゆかりのある北斗七星をモチーフとした7基のステージを構築すると共に、一の井戸伝説にちなんだヤナギを植栽し、シンボルツリーとした。

「傾斜のある土地に水平な構造物をつくるのはプロでも大変。生徒たちだけでよくやりました」と栗原教諭。ステージ完成後も、放っておけば雑草が生い茂る広場を整備し続けている生徒らは「ここに来て自然に触れているとすごく楽しい。今後は具体的な交流イベントを考えたい」と、新たな目標への意欲を語ってくれた。

学校法人国際総合学園 新潟農業・バイオ専門学校

楽しいガーデンづくりで繋ぐ 緑のチェーン

新潟県新潟市



1区画1.5×2=3㎡のミニガーデンに植栽してコンテストを行った



ミニガーデンで使用する資材、オーナメント、花苗は貸し出してもらえる

今年から来園者の投票によるミニガーデンコンテストを実施



ガーデンづくりは楽しい!!

個人の取り組みを まち全体の緑化につなげる

新潟農業・バイオ専門学校フラワーデザイン科の学生は、これまで新潟県立島見緑地で、公園指定管理者のサポートを受けながら、外部実習の一環としてミニガーデンをつくってきた。しかし、施工面積が小さいためか、ミニガーデンができて、むしろ芝地の方が目立ち、寂しい印象だったという。

そこで、今年新たにガーデンコンテストを実施した。ガーデンコンテストとは、コンテスト形式でミニガーデンづくりを競うというもの。公園に足を運ぶだけでなく、市民にもガーデンづくりに参加してもらおうという狙いも含まれている。

島見緑地は、新潟東港工業地帯の緩衝緑地帯で、工場地帯で働く人や県民の憩いの場として、幅広く利用されている。周辺には、小学校や保育園、介護施設もあり、格好の散歩コースでもある。また、遊具があることから、親子連れにも人気のスポットだ。

これまで参加者は当該学生に限定してきたが、コンテストになったことをきっかけに、出展者の枠を拡大、地域の住民や公園利用者、また公園に遊びに来ている子どもたちにも声をかけた。

「花やオーナメントによる装飾面積が増え、芝地の会場が明るい雰囲気になりました」というのは、フラワーデザイン科講師の星野花恵さん。「誰でも参加できるコンテストがきっかけとなり、まち全体の緑化につながれば、いいですね」と、星野さんは話を結んだ。

一般社団法人 信州子育てみらいネット

中野おしゃべりガーデンズ

長野県中野市



地域に開放されたセラピーガーデンを目指す



植栽に囲まれておしゃべりを楽しめるベンチ



近隣の保育園から遊びに来た園児



足にやさしいウッドチップが敷かれている



周辺に暖色系の色の花が咲く植栽を展開

おしゃべりしにきたくなる 開かれたガーデン

児童発達支援センターみらいくの竣工にあわせて、建物の外部空間には、緑地がつくられた。児童発達支援センターみらいくは、発達支援を目的とする施設で、本人支援を中心に、不安を抱える親御さんなどの家族支援を行う。みらいくは、その周囲につくられたガーデンと共に、セラピーガーデンとして機能させるように計画された。

施設の南側には住宅地が広がり、また北側には果樹園がある。ちょうど宅地と農地に挟まれるように立地している。近隣には保育園が二カ所、公園が一カ所あり、これらの施設を利用する子どもや家族などの利用も期

待されている。ガーデンは、施設利用者を限定せずに、地域に開かれたガーデンを目指し、24時間・365日オープンを書いている。施設が閉館していない時間も自由に行き来ができるのが特徴だ。

園内の緑化に関しては、ゾーニングと合わせて綿密に検討された。主要道路が通る西側は、中高木を多く配植し、目線に入る緑量を多くすることで、緑視率の向上が期待されている。

「ガーデンの大きなベンチは、利用者の居場所を目指した」と言うのは、信州子育てみらいネット代表理事の山岸裕始さん。「おしゃべりしたくなるような場所になってくれれば」と付け加えた。地域の溜まり場として年齢の違う子どもから高齢者まで、さまざまな利用者が落ち着ける場所になることを期待する。

EARTHWORKER合同会社

土中環境再生で京都 大宮交通公園を 生態系コリドーに！

京都府京都市



しがら工法でつくった斜面地にフジバカマを植栽



硬くなった土壌に杭を打ち、しがらを組むことで土壌に雨水がゆっくり浸透していく

坂田さんと共に行われたフタバオオの植樹。京都三大祭「葵祭」に使用されるフタバオオが激減していることから展開されている「葵プロジェクト」の一環

若葉を茂らせるクスノキ。土中環境再生前は樹勢が衰えていた



水循環でサステナブルな環境を育む

2021年、京都市の大宮交通公園がPark-PFI方式によりリニューアルされた。整備・管理事業者は大和リース株式会社。パートナーとして植栽管理を担うのは、総合的な環境づくりのコンサルティングを行うEARTHWORKER合同会社だ。

交通公園という特性上、コンクリートやアスファルトで覆われた敷地や、踏み固められ下草が生えていない土地が多いことから、雨水が表層流出してしまい、植生環境が悪化しがちであることが課題だった。このため、まず取り組んだのは土中環境の改善だ。木の根の周りに溝を掘り、杭を打って雨水が浸透する道をつくる。斜面地には剪定で出た枝や落ち葉を組んだしがら

を配して土留めすると共に、水をゆっくり浸透させ、微生物や生き物が共生しやすい環境をつくった。

「入口にあるシンボルツリーのクスノキも、見違えるほど元気になりました!」と教えてくれるのは、EARTHWORKER合同会社・代表社員の中島麻紀さんだ。同法人では管理人スタッフを現地に配し、維持協力団体や市民と共に植栽管理を行っている他、環境保全につながる各種イベントを実施している。訪ねたこの日も、ネイチャーガイドの坂田昌子さんの講演会とワークショップが開催されていた。「土中の通気・通水機能が回復すれば、植物は自ずと根を伸ばし、多様な生物が生きやすい環境をつくってくれる。そんな好循環で、総合的な地球の美しさを目指したい」という中島さん。その挑戦は、ここで成果を上げつつある。

大阪市立瓜破北幼稚園

豊かな感性・感受性を育む 緑の園庭環境づくり

大阪府大阪市



暑い夏場は、園児たちも木陰で一休み



園児たちはピオ
トープの水生動
物や水生植物に
興味津々

チョウがいっぱい
きてくれることを
願って



ピオトープは絶滅危惧種の保全にも寄与している



自然とかわることで園児たちの意識も変わっていく

まちなかに里山の環境をつくる

大阪市立瓜破北幼稚園の園庭は粘土質のため水はけが悪く、とくに近年の気候変動による豪雨などで園児が植えた作物も育ちにくくなっていった。そこで園児のために、ピオトープ＝「人と生き物が共生できる環境」にしようと保護者や教職員が知恵を絞り「南園庭再生プロジェクト～5年間計画～」を策定し、大人も子どももみんなで取り組むことにした。

「この緑化は、単に緑を増やすだけでなく人と人とのつながりや教育的意味がある」と言うのは、幼稚園園長の加藤美和子さん。幼児は直接体験を通してさまざまなことを学んでいくという。

「園内は子どもたちにとってすべてが学びの環境。と

くに自然は教えないで教える学びの宝庫。自然体験や遊びのなかで、豊かな感性やたくましいからだを育ててほしい」と加藤さんは言う。

池に小川を設置し、水を循環させる。溜まるヘド口は天日で干し、刈り取った草や木の葉と共に堆肥として畑に還す。人の手が加わっていい循環が生まれる。

また、園内の緑化は基本在来種とし、生物多様性にも配慮する。生きものを呼ぶ仕掛け(チョウの幼虫の食草の植生)の「チョウのレストラン」がつけられた。果樹や苗木を植樹する。畑と田んぼに土を入れ整備し、2段程度のだんだん畑は畑全体を高くした。

今後は、近隣小学校と連携し、幼児と児童の自然体験での交流にも力を入れたいと加藤さん。自然環境教育での幼小連携の取り組みに期待を寄せている。

学校法人 三棒学園 一万城幼稚園

思い出のガーデン

宮崎県都城市



砂利やステップストーン、枕木、ウッドチップなどさまざまな材質で構成された園路



苗をつくり収穫するまで、みんなで楽しむ野菜づくり



サイズが異なる四つのピオトープには、種類の違う水生植物、水生動物が生息する



ステップストーンをどこに配置するか、園児たちもアイデアを出した

遊びが園児たちの成長を促す

一万城幼稚園は、遊びを通して学びを深めることができる環境づくりを目指している。今回園庭とは別に、新たに園舎、園庭に隣接するガーデンを作庭した。

野菜づくり、花壇の植え替え、芝敷き、資材の色塗りなど、このガーデンでは大人だけではなく園児たちも庭づくりに参加する。自分が見た景色や自分の感覚を大切に、ガーデンと一緒に成長していく。そういう想いを託して、「思い出のガーデン」と名付けられた。

園路は、砂利やステップストーン、枕木、ウッドチップなどさまざまな材質を用いて構成されている。また、小さな丘をつくり、アンジュレーション(波)を設け、園路の材質と合わせて足(肌)で感触が楽しめるように

工夫された。

庭の中心にシンボルツリーとしてヤマザクラを植えた。植栽は、シラカシ、アジサイ、ヤマボウシ、モミジなど季節を感じられるものを中心に選定。草花は、飛来するチョウの蜜源となる宿根草と色水遊びができる一年草とに分けて植えられた。直射日光を避けるために、パーゴラタイプのガーデンハウスがつくられた。

「子どもたちが発したなにげない言葉からヒントを得て、それを遊びのなかでふくらませていきたい」と語るのは、一万城幼稚園主任の三城陽子さん。「遊びがいっぱい輝くいのち」のスローガンどおり、園児たちの成長にあわせてさまざまな遊びが誕生し、それが園児たちをさらに輝かせていく。そういういい循環がここには生まれているように思われた。

[実施概要]

募集の対象

シンボル・ガーデン部門	全国の民間・公共の各種団体	緑のもつヒートアイランド緩和効果、生物多様性保全効果等を取り入れることにより、人と自然が共生する都市環境の形成、および地域コミュニティの活性化に寄与するアイデアを盛り込んだ地域のシンボリックな緑地プランを募集します。
ポケット・ガーデン部門	全国の民間・公共の各種団体	日常的な花や緑の活動を通して、地域コミュニティの活性化や、保育園・幼稚園、学校、福祉施設等での情操教育、身近な環境の改善等に寄与するアイデアを盛り込んだプランを募集します。

表彰

シンボル・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点	副賞800万円以内(工事に対する助成金)
	都市緑化機構賞	1点	
	第一生命賞	1点	
ポケット・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点	副賞100万円以内(工事に対する助成金)
	第一生命財団賞	1点	
	コミュニティ大賞	8点	

審査委員

委員長	進士 五十八	東京農業大学名誉教授・元学長 / 福井県立大学名誉教授・前学長
委員	天河 宏文 近藤 豊和 坂井 文 隅野 俊亮 永山 妙子 三上 真史 村上 暁信 北奥 郁代 棚野 良明	国土交通省都市局長 産経新聞社上席執行役員営業統括 / 東京メディア営業局長 東京都市大学都市生活学部教授 第一生命保険株式会社代表取締役社長 マネジメントコンサルタント 園芸デザイナー / タレント 筑波大学システム情報系教授 一般財団法人第一生命財団常務理事 公益財団法人都市緑化機構専務理事

役職は2023年審査会当時

スケジュール

募集期間	2023年4月1日 ~ 6月30日
審査会	2023年9月8日
受賞者発表	2023年10月16日

主催等

主催	公益財団法人都市緑化機構、一般財団法人第一生命財団
後援	国土交通省、環境省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、第一生命保険株式会社
協力	一般社団法人建設広報協会、一般社団法人日本公園緑地協会、一般社団法人日本造園建設業協会、都市緑化基金等連絡協議会、株式会社産業経済新聞社

2023年度運営体制

Green Story

2025年3月19日発行

発行者 一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力 株式会社 アルシーヴ社
佐藤 真
斎藤夕子

撮影 坂本政十賜

デザイン・レイアウト 河合千明

印刷 株式会社 エイチケイグラフィックス

ISSN 0289-7172

一般財団法人 第一生命財団

Green Story

